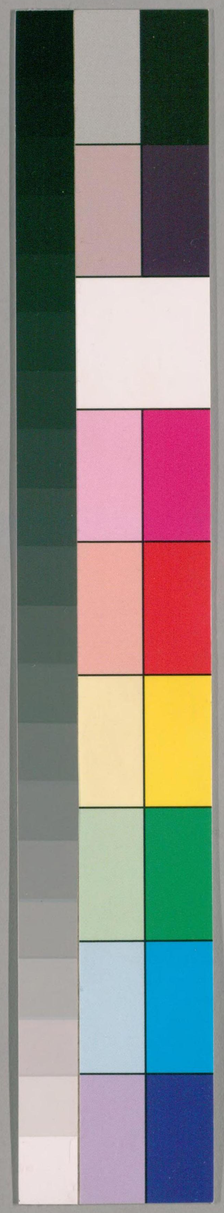
857
118



国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用

源氏物語抄巻第二

目録

うけせ見
タあか

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

宣蝶　以下名とり

並(ナラヒ)の儀を先横(ツヨコ)をもつてかとしてうつか演(イヒ)拡(ヒツ)ホれ抽語の
ことし但し物語にの手まて竪(タテ)のならひまたとへを下
巻に可書ことゝ成す也をもうらて書きりしかせるのこ
せし又一巻のうちに横竪(ワウシユ)をかゝるもあり来摘(スエツム)花乃
書きりし先を並(ワカムラサキ)同(シ)河の事をもて来に若紫なる故
のるし故かゝり宣蝶(ウツセミ)乃巻を竪の並也　花　すくに云
てゆゑん事なきとも横へ不入して不叶なる所へし
与風箒(ハヽキ)来に宣蝶乃事出さるる所来をとくしらせん
のためや　玉鬘(タマカツラ)乃並(ナラヒ)にも別れへての事をお用く
書きを　史記列傳(レツテン)司馬遷(シハセン)書さるや古人一人の事をとく

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

しうきんとて横に書り　此抽籤を史列（シレツ）と心得て可
然哉空蝉の列侍と心得てよく叶（カナ）也　並一字合トヨム
並序と書て序（ジヨ）をあてすると菅家（カンケ）の説也
此と云字並（ニ）心叶と　称名院殿渉説
称られ　たゞ木きの音乃いこつら外（フシ）と仕給たる中川
の音まさく乃取る事　たゞ木こそこまうとの名成こと
くしきと發言（ホツコン）あり　ことくしきく名付るひのん
と仕給をてみるなり
我をかくんり　源氏好父（カウシヨク）のみをたる事しし
なみこをしへ　小兵也
海めやり小同ちまし　あまり事さめ小めさまし事しも電（ウツ）

のためにはこれなるとおほしの事をむなり
の給ひまつを仕給　あまり事小兵より称んとろ小兵仕給
して出給ふ様の説也
やうてつれ分りて　電のむ中なり
かくてどうめ　仕文なき乃也あるまて何とそして経を
てんとおもふもこゝろぬなり
且つらはし　小兵むりし電乃とけられぬの力仕給
きとなり
紀事國よ　まへを暫時（ザンジ）在東也國守（クニノヤミ）なれを在国（サイコク）成事し
夕屋の　夕やこへ道たとくし月まちてり無れ事
の世こそ君をもみん　詞はりる事

清いせう　わさなきとて不安也し
かそうう　小忌詞後達（コダチ）が弱（アラハ）なると云ふ付也
西の御かた　打ちの萩也　空れまく子る御へし
伊与母のむすめ宅の西より　お家（ヘツケ）へし
こうこせ　晋中興書に囲碁（クイキハゲウシユン）荒舜（テヲシユグ）に敬愚子（ミ）に也
弟子に碁をうちへさて世紙に忘させてさて世を人にゆけ
らん用なり
けしさ海に　小忌へ清る事を辰巳（タツミ）の事よりもちりひて
西乃町こへ見給ふ也
木丁なやも　二季にのも御也　衣裳（イシヤウ）も如此屏風なとも
うちとけたる事　無勿論（モツタイ）と女の油行（ユダン）乃をしへなり

ちもめの人や　さかならぬる御へし可強むりちや
あれあやれ　女房の紫宋（シヤウク）を又日又日よりそひとへをき
れかとへをひとへ二をひねまのき祢しる物也此時を
更りひとへをきを　あれとそこうちきや
あれ紫（ムラサキ）に染（ソメ）たるへし　花　此を用給へ里
かまくのあらん　火新不分明（サルフンシヤウナラ）むを用也し
物当る事　をのくしからされなり
ひ文果くし　碁（コ）うつ時をまりちなとをへし
碁にんむへて男をわきをおくなや
いつ日とり　打ち萩（ヲキ）也　東向
母屋を中に柱（ハシラ）一るくにありて庇（ヒサシ）又云次孫庇（ヘコヒサシ）と

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

といへり母屋をかれ各所老(ツチ)に机丁(チヤウ)成かくれ也　花を
寝設(シンテンツクリ)作と云り辰巳(タツミ)ゝ西(ニシ)をつん通しし行ふにそれ然る
を是乃所なり　是を西をむきてうちめる所を打ハ正
なりむくなし
白うを拘　あやなり
二あひ　二藍　二へ　やもよむ也あの花とまゝ花とまゝく深(ソム)
上(カウ)家下(カウ)成(ヤウ)也
くれ方井のあし　袴(ハカマ)乃帯まてなり
をうろく　河　傍側(カタハラ)く　ひさうなさの類也
かこはらくまてすくにもなれ所也　正(シヤウジキ)にあらす
かこまそなり　はうろくなひと俗語(ゾクニ)にいもひ同

先たとしてなくらるゝ心通也
そゝろのなる　そゝろなせいなり
さのまを　その字渇(ラル)也　さのまたれさ海也　裏のかり
を　心同　裏乃浪(フルヤウタイ)様所也　所乃ミ心を不可付也
裏乃時を　不濁(ミラ)　もをなくして肩(カタ)をまゝるへし
孫ち歩たる　めしかしきれとなり
むへよう　む親(モシヤ)の見るめにて世上にめしとたりふら
先とや　宜　又説
のとまゝにて　又一のとくとかむる方へ成也
あちらを　闕(カクル)　結(ケチ)　心同(ニユミ)の時結び字をかけり
変(ケツキヤウ)するあらろなり　だめれ事にも通用をり

一結の前也　結一字りくむるとゝ云心也　むすぶとう
たむる心ゆゑ也
ゆうとけ　早速　心とげた　利振(リコン)也
おく乃人を　を蝶也　源氏辰巳ゝ是ゆらんるれいくら
るれともおくとをゆくゝゆみくしを為様おく乃様る為
ゐし　打を此萩を端(ハシ)ゆまへむきゝるゆへる事
ちかよう　地　又持　夜叉也
あうせよう　劫(コウ)　をひやうをとよめり
むりひり使いてを不叶むる為へし　人の心我をひや
うすあらうなり
いてあの行ひ　打を　の詞也

さけふる事　その海あとなり
と紙りくみうよそ　十女世四十也
いよのゆ此ゆけた　雑藝此うくひなり　六花集ニ
右ゝとて出きり　いよの湯(ユ)のゆけたのうすはた八ゐ
を九中を十六すへて世三ありと云ゝ
雑藝ゝ方ゝ人のそへをよますとうたへ事
又京家の説ゝ人ゆけよのうを又百世九とゝ人事
説ゝ相遠(サウイ)いよのうゝ泥(ヒン)ゆあ何分なれを又縁(エン)也
雑藝いよのゆ此ゆけたをいくついさ志ゝまのうへを
やまうへをよますやく志ろ志るらんや
たやしへなくはおかひて　を此也

まさしさ進さる　腫也　ひさい高(タカ)まれくとしさる
さ海なる色しまふたの学(アツキ)心也
孫ひまて　孫外さるむの町こへ心同ひきこ心也
道見は通けれとも塩(シホ)らしきるを
打ちの萩を見事なりしを退(シンタイ)又塩のなくとみえさるを
かこるまりに　志川のあらぬ所なり
うをまゐまは　かるれたをとよむてし　たちふ新く心也
あそつ笑し　あそくしさまらるゝ
見ふふかきり　源氏にみえ給ふへくを引給ひてのこ
こ見ゆるを物ひうちとけさるを御覧したれ事なり
新へしうをとけた　えこ乃ためいとおしきこしさるを

進いならぬ　お人ゝへ発さたせなりさると小兵ゆし也
志川まれ湯ハ　小兵うむ清うひあそくしのらぬ所也
屋内と云儀いのし　お同清うなしおくまてよく志
れさを
あがおく　追字　目のおくなる色し
わの兵　小兵を女帯衣いへり　我兵と云むなり
きののそれいとうと　打ちの萩也
ちりし　清外(リヤウシヤウ)状也されとも清らんしさる相をとなり
こたひ　今度　日本記
ちうし　陸(シヤウ)子也
風吹とせ　風吹と人まそいひてアそけくしあゆん

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

と云ふりひてし掛を　六帖字也
さくミひろきて　屏風（ヒヤウフ）を火の執けして逆話をうゝへた
執なり
戸はおちぬる　小君かへし　かこの戸をめぐしも女房
生乃加たへりて称さる也し
やはらのる御しを　優（ユウ）なるの　結句（ケツク）志るきむなり
いさふ　君あゆるおみこのかゝる名れ衆をあらろとけた
御いやそ称ら執く
ひ執そなりめ　衆を完ぬるハなりめふくらされて志を
あのめうりとなりまけり　いやそ満もなひとなり
言女能まて可徒　様（クラ）の言今一首あり不叶（カナハ）

うらみじろ、　男をまゐりを時衣着するなり
ゆうの志もに　次第なり女房衣称さる也し
掛くしと　又いきこまれまく打ちの萩（ヲキ）と云称ふなり
且ろき御心あさく　双也
世中　男ゝに不云ようを御れをこたるなり
あへりふも　よそくもるまや
たとらん人を　掛をよく推量（スイリヤウ）を執人ようなり
さらぬさしまさる　源氏社御事さしまされやもおりひ
たとらぬなり
人云さる　不惠る御の一人とや　若人よむなし
あひおりひ給へよ　源清詞也

又されへ事　伊与ノ女紀ノ当なと成事し
事をくしう　直字也きまくなる心気　あり乃まく
ふとむ切て可法　実と仕様同じむり　叶也
人のおりひ得らん　折詞也
ぬ事すへし　也乃夜なり
戸城やをら　るろくとあくるる事
海ろそと　小恋苦也
とさまへ　かさ海へくれなり
あらす　何故もなくあくりとへと云也
民アのおもと　得者　清祥　源氏をたろと云て自答
小民アと云也事にあ得よとりへ事　れ也也　応なり也

云心気向をさしていふあらるなり
事しう　あやし也事る事人乃せいたり事と云る事
だぎぐち
い海さしいけ　小恋也同雅なりんといへり
をしり魚さて　古後楚をなり
わさ殿のくち　源氏の流在語事
おりとそ　源氏を民アにして以へ事
いふ魚もきかて　民部の丞事　丞事して腹痛とて急い
ぬるなり
いよくおりふへ事而也
以と姫のうふくを　源氏也をにくを語へ以れを小恋も

めいまくるなへし　一儀にも源氏宅乃也云心是如何
おりひきけまし　宅(ウツ)有小恵をもむつましきへありきつ
ましきと此語也
称られ　發云　首尾(シユビ)於没(ケツ)するなる
さしまへ　わきとなくしてや
うつせ見乃云　せこのもぬ者を衣にきを行へ是仙人も
蝉仙(センセン)と云あり　唐世劉合(ニリウカウ)を背破(セヤフレ)て仙成(ニ)るや　蝉蛻(センセイ)　蛻(トモ)書之
一説蝉(セミ)の辭磬(ケイ)を折(ニ)似るとも云り
うつくしきと云心もありうつ見しいとせりしをそへ
字也　うつせ見れ妹(モ)思ふとよめる
その人も　形を也　文あらそ空(ウツ)の心中いりしと又思ひ
行ふ者もあるなり
のつきつかふ　小恵(コキミ)を源もおさあひ乃此乃使(ツカイ)するは
よりうぬとおもしめされんとをつかしめられくなり
ひたまみ文　源にも空にも此根(ウラミ)小恵の方上也
いせおれ　すくの山いせおのあ海乃すて衣温訓なるとも
人やみるらん　後撰(コセン)に伊平(コレヘサ)物名のをやにきぬてきを
きてとりにけるこひとてとあつる
又きる　抱より又しおれ人もるまこひをなみてきをあ
へきのうしけるかれ
されたる　双也
きけむまと　宅もむさくならぬなり

あまりなるう　伊与ノ母ハ不嫁(スカセ)ゆゑ也　とりかへを掛
ゆもうれや世中をまとしなかうの秋方とおもはん
たのひ　知り色ゆれ祢と堪忍(カンシン)不殺となり
うつせみの　うつせみの世をたゞうるひ心なる色し
たのひくにぬおくと云計也　是より巻ゐとをり
源氏の御文乃うこはしうし書り　伊勢集ハ此言あり
伊勢物語ハ此類(ルイ)あゆことなり　河ハ委(カハシ)

夕良
源氏十六才ハ夏より十月まで乃るしみえたる竪(シユ)の方
らひや　奇并以詞(テヲ)巻ゐとをり
六条ゆゑ里　御息所(ミヤストコロ)乃事　抄而(ハシヌテ)書出ぬ　桐壺(キリツボノ)御門の先(セン)
帝(テイ)乃御息所也　源氏の筆方(ヒツカウ)一のとくあり
大貳乃めのと　源の御先の也也　皇子ハ列(レツ)たらを二人
まへ気ハ　親王の列ならを三人なる色し下の詞ハ
たくさむ人あまたあゆやうなれとこの御人ハ大貳乃
さし御気ハ左衛門のめ乃也とてあり来摘(ヌツル)ハ巻ゐみし
よりを見を帷光(コレミツ)の母也
河ハ擅波羅蜜(タンハラミツ)　出家のめ乃とゝ心へ里

擅那（タシナ）者一なれへし戒のめれとはも成り　尸羅波羅蜜（シラハラミツ）

そ先のとも　下略之

法車の趣は　大門を法へし者を不開（ヒラカ）とのなり

むろのしあなる　きそくとなれ大路乃さ海也

春の日はそれ法柳を手指てみまそ鶴の大路おもほゆ

ひのき　檜壇　又檜（ヒハ）笠とも云く

ぱじとこ　半蔀　易（エキ）ニ云　其屋（ヲ）芝（シ）家（ヲ）蔀（シトミス）

車にも半蔀あり半分のこへ何くる屋うに志るる物也

をそれなとも　いよを也　のやをそれのあなる也

立さ海にふらん　うしろまゐるる若をのひあのゆるむ

なる也

たきたの事　半蔀（ハシトミ）乃こしろにゐる若ハ乃ひあの事

てゐる心也　哢りしとこのうへよりみろそかをとる事

なき様にかひやるとるや　何う姫まへて見すへ事也

屋うのそまて　源必此れ不云御覧也　又いやし事所に

可能人とやう果りをてるを

所事も　何に源祥用心のため也　変化（ヘンケ）れをのなこおと

ろのさん用也　呵　えをみとよむの詩（シ）に意之を祢名

院殿法説

雅なく　内へちの事心也

いけうのさして　世中をいけあのあしてわうなんん

ゆきとまるをそ者とあこむる

源氏の性みえたる　弥勝也　嘆

玉のうてなも　六帖　何をんに玉のうてなも八重葉を

へらん音にふるまふ祢め

玉乃も同るまちりすまとなり

きらかけれ　昔ハ秘事にきり　不入事なる

磐にせん所を扱ひて加ふ物にしたる　大裏なれ所も

あり　りんきなものやうに扱ひてしたるなり

それ連日とりしたるの月也　夕良のほかに蠶眉に似たる

ゆへにいへり　独とは小家のさまあれるなりまひらよ

あなる花れむや　嘆　早晩辣平　宅開眉見気強用

絶に展愁眉　白氏の集

とちかた人　うちかたをとちかた人にそのかしまれ

そのうてにしたるくさけるを何乃花ろを

なに花そといはんためなり

渉ずい人　歴徳太子　甲斐乃黒駒に秦川勝一人付て也

とりを里弱ひしにしたりふ故の名なる是始也　今は

大臣大ねへを上から紙下大かたを自身用さ成へし

主人をもつ連との儀なる

夕かれ　又結以上人れ家にハ不拙といひ取りをきり

清水油を拵双紙にも　花も名をおもし詠けれとも実

乃見にくれと云ふ　物語り　對しての名る物也

論にかきて面白物といへ里

これものの色　河に委（ゲシ）　定家卿ハ　筑波山ならてもよ
まそかゝの弱人也　俊成を他所（タシヨ）にくそいかゝとも　又
子ね遠（サウイ）あり
むまくしからぬ　不家也
ゆれたる　古なる心可然　嘱
古心ならハされたるの
左礼（サレ）きつとをぬ家乃うゆうなる心の
いたうこうしたる　蒸（タキモノ）になり
枝色　枝（エタ）もふけくうれ花と也
のぶをくき　帷光（コレミツ）詞る御意し
ぬびんなる　ひゝんかいとやしなり

あやめ　綾目　黒白　又目目
らうかそし気　往還あ御意とする
むこれ　雑ともなし
たゆたひし　狩豫（ヨ）　万　やすらぬ心也
いむるす　更戒（ミカイ）也　尼に成てそ紫人へ出仕不叶
よこの通り　藾生　活目
あみた佛　源氏にあひ生（ミナル）ゆるさ也　来逆（ライカウ）成就となり
日比　源詞
くらぬたかく　源御身れをなり
こくのたれ　淨土　九品也
のたか　頑　よりらぬをかへよくみるならひる也

子どもを　子を也　出家妓婦のとてめくりし法貴し
ろふなり
おりふ理よ人く　清母　又祖母也
をくくむ　大貳の次　左衛門ゐ御し
人と成て　長成
ほらぬ　世中にほらぬまゝの事乃なくもうれちよを也
いれ御人の子乃ため　め乃や養ふ川まは母ホ同心也
をかう　すをうとよむ祈禱なや　祈禱を出たまふなり
ありほう　先法祈禱て只今ほらん　祈勝云々
心あてゝ　さしあたる様なるさ海なれ也も源氏とお
をひやるてわかし　れ情ゝ出しさる　扇成也し　呼
おわるまの首尾也　両を家の光をうれのりとうめ也
ゆへ御矣　おもしめり　小家よりおりひれかまあくう
すくまれらをし書ふるよとなり
うるされを　好父を也
ふくしも　尼姫時分とはしたかやう小菅ゆる帷光の
心底を源おほしめし云ふなり
無うめいのをけ　三ケの一也
且かく　好父の祝ふ也　高雪兄弟なと文つり通りし　訓
ふる掛て音なをよくよめるまや
ほらいを　さてと云心なり
このうしをし　好父のこと也　双城也し

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

明る夕日　夕良乃都を面向の家西の当たる面し
文明く　夕文のけるる所へし
和得えをもの様　うら和りひをりまて　懐の心なり
清方の様なれどどのむかしてくかをそよくあ人里
必ひつりし様あるなり
りし見給へ　文なせそうして気使なしんと清かれす
とかしをり　口とく也言なとをもすくとなり
ものの下の　新定也　大人にこれのしき事きの後ゆし
さぬことなくて　想ふ分別可答ある事
れひらのなしましのれ　大かくなくなりせ心ぬて可強也
うしもなく　形その様也

ゆ当たる　春の時乃事思出給ふなり
むまのかえ　女の事ゆへ名こうとかくなる事
人乃ため　源のさうしけまと伊与女ためのは寄持とれ
おしめしぬ
加ろらかに　源の清定退に也乃多の他あそぬと思ふ
されへ気　清也事なとをそするなり
今一つ　打そ此様也　本性をつかし
主ありとも必あそんと思ふしめをる所へし
秋にも成ぬ　相思ひそふ時分也
ひきう面し　六条清息所をいひなひのし給て後無言
とるを

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

中屋　中吾かとのむ兄　又吾お通也
志ゆう　夕良上也
右近の志こそ　じこうき大裏にも女儒こうと云て殿と
云ほとの詞也　てまたにあらす　中ゐ没こうきて
まをもや　右来むさとみてをきこるを　称名院殿
法新注
てかく　まてあてくむなり　半搔
うちはしたり　なの扱乃志ノ人まくハなくして廊下か
とのゐを扱ひうちはしたむるを
いりきくる掬ハ　このきてゐもや　ゐ心まく行道する
掬たと同じなる心し
いてこれかつらきの神
金峯山縁起曰役優婆塞金峯山与葛城峰為行道於此山
右案法國法神今後橋之時金峯太神不勝咒力而且能始
之葛城一言主太神又且始能申於行者以自形醜於間能
云々　倍繁略之橋始也
むつかりて　腹立也
なれがしくれが　何くれと云心なり
ことねり　小舎人　中也為具する童也
さしかに　駅中のを能見定めん掬をとるを
かしこの　面抜れ掬語のかしなり
もらられ　帷光のおもせうしたらされて主のまた神を

するとなるを
おもしろ海させ初てなるを　くさくしき事のこゝかまは
かくしつと双ノ一体也
後漢書記ニ　多事ケ大　不記云々
細碎（ナイスイ）　クタくシ　襤褸（ヤウシ）　日本紀　窄（セツ）
あはう人　帷光（コレミツ）とけはう人の見付たらはや也
夕飯者（ユフカホノヤト）へもとひよまり帷光抜けはう人はして人乃也
云てかたくお前（ガウタウ）をり
けさのかと　源のおほをむとはしかゝゆと我とおりひ
はまし給ふや　急（キウ）なるを行来短（ミシカキ）と可思く
かかをも　昔八ゆゝ雨して人まあひよかとなる

むかしあるけん
三輪的神若　倭迹（ヤマト）ゝ日百襲姫命（ヒモソビメノミコト）　日本紀むそやまと
とひめれみこと夫禮（フニカタツ）て云ク　志ほ日よひ給そみしまあ
きらかにかかをしてんとあざへていふ君かくしけの
中にをらんおとろくるすかれやさとしひめ乃み
こと心のうちにあやしむ夜明て見しけをむしきて
みるにうるはしき小蛇（ヲロチ）あり衣紐（シタヒモ）乃ことしおとろきて
さはふ時大神ならてこちまちに人乃かたちに成てを
妻（ツマ）なし禮ていとく汝我（ナンチワレ）にたちみを我の命りていまし
まちらこをんと云て大宅を命こて三諸（ミムロ）山なし乃なり
ぬあしにや海とし姫のこことあふよみてくぬく

急右刈（ツイサタルナリ）　箸揞法而薨（ハシニツイテミホトヲカミサリヌ）　お得いちまをふれ時人きを
のをはしれけりと云ひ墓（ツカ）をもつ人つくり夜を祈絶る
大坂山のゑをそこひて絶山（ル）より墓りいたれまて人
民あひついて手逐（タコジ）待してそこふ人よそていたく
大坂りはまてのかまるりし村をたあしりあれハ
あしえてんかも　別右事不審
大夫をうたりひ　帷光（コレミツ）大夫をりけるを
民戸大捕（ミンブノタユウ）をかくへし　大夫をそ又結也
あぎき
たゆめて　源り渾（ユタン）行させさいらせて又いけかたへり
かくまんとおもひしあや奴めり

かくれが　北源宍（オクルカニ）
るれめにおりひなし　行かくまるとも大りて不堪（カンミン）悪
ふらそるれやもせちまおほしめすむなり
世つのぬはそてなし　始終（シジウ）あぶましきと云む也
いけまのきつ祢なんん　だらされ祢へとなり
人をそのす故に云り　右塚（コチヨノ）右事　白氏文集
世よなく　うたはしさるをやもひことをしたのふなるを
なるにましてさるを
心なりし　源氏心乃よ而へうつらん事をかへなり
八月　そはしとよめを
るをそひ　稔　農　田地（デンチ）絶毛（サクモウ）乃心成也　穢（シヤウ）　毛詩

ゐ中乃　ゐ中ノ音信も絶はつる所となり
水駅　水ノ旁ナル駅なる也
そばめて　欹　鶏鳴起欹ス
おりひの道するさ為なりて
さて大やうにて何ともなひあひて可然也
こゑかしう　垂字　大をうなる儀也
あやくと　なるゝとのさ為なり　蛙鈴記曰
宮等かく里松風の音たかくてつるこゑかくとる所
天原のことゝろかしきるのこともとふ中をさくる詞
うるし　詞はるりとまり
うしうきて　碓　独到山中ニ音静向ハ中ニ行ク

何ノ処ノ求ル碓ヲ春ク白米ヲ如シ　白米と碓や
まくらのこ　枕上
もろたへ乃衣　詞のひて面白とや
ゆれたれ　曲する所へし　垂むなり
こひさるむもあり
うるのなかれきりくを　毛詩十月篇云　八月在宇ニ九月在戸ニ十月蟋蟀入我床下ニトアリ　源氏を壁に鳴
とかへまぬるするを　とて小家のていなり
志ろきあとせ　白袷のきぬり　只今咲れるその上をきたる
為し　啼
あるわざとする　むのめつよ雨となり

世すれたる人とも　翁男なりあひし人ともみえぬるを

あのあるへく　夕良乃女房衣也

みたけさうしにやあらん

御嶽ハ金峯山　吉野ノ蔵王へ参るに暁をまつ示　弥勒出也

世の中ハ数へ又金をまもり給ふ権現也　明玉集

おもふひ紀の川上をけさみまても金の流るゝ雪かり

すりをを

ぬかつく　額拜　叩宴

あしたの露に　朝露貪名利夕陽憂子孫　白氏文集

南無とゝ　ふりとよむ　弥勒也

うはそくかな　優婆塞ハ俗なから佛弟子なる人をいふ

比丘比丘尼優婆塞優婆夷とて四部の弟子といへる

うはそくかおこなふ山の椎かもとあなそはそはし床

にしあらねは

長生殿

七月七日長生殿夜半無人私語時　長恨歌　下略

あちきなし　はかなきと云心也

行末乃世の事　現世ハうきさためなく三世と云るとなり

むそやなのめり　嚀ニ委　頓而清哭をん相あり

前乃さ為ひりとすれと也　源ハよせをさゝも氏

いさよふ月より山のはいやそらにむなり

別ニ出心ぬりても何をいふ也し

ゆくりハ　不意　卒尓（ソツジ）とも同心也
思ひくまて　仏滅（フツメツ）を云恵相（アシキサウ）なり
るふりし乃院　法原院のるするを
あつかり　結院にお尚（アツカリ）あるを
とくらし　末共滋（シケキ）也
きこれをしへ　車乃簪（クルマ スタレ）也　さへまて相ぬれるるむあり
さくまてしへと云むなるをし
まさかやうなる　源氏法心也
つかしへ也　いかしをも如此深切（シンセツ）のおりひかせなり
山れをの事　山乃をくりをかくきかるなをしらて
ひ月れむもよめ里山乃を源によくへ　里次の歌う

ぜしへるれを何となくおちれるまゝむあるし可哉　咲
うのさし　夕言せりれにならひてとなり
れましなと　用意乃易也
むをえんなる　ス中ねなとのるすむ乃うちに思へ里
けいめい　経業　うやまふむ也あるを
あのみありさ海　をそれく詳まて云也
とのかも　左大臣殿にもなり
されへ矣　志ゝし矣家司（ケイシ）まて詮くをよひりけるを
さんりと何也
はりてめ
とりけく　法膳（ゴゼン）を主次るしとなり

おきゆ川　鳩とりのおき中ゆそこしぬとも思ひし程
らんことは言ふめやも　まかの息也（シヰナカ）とはくくる詞也
こゝは所さへあるに沖中川なきをこしやなり
名所と云或説在之　萌河（シヰナカハ）とも云
あちすゑ　いけるの柳なとの草も秋の野られあとくな
れとなり
秋の野ら　里を遠て人をかりにし者なれや庭も籬も秋
はくらるゆ
あうとげに　氣疎（ケウトキ）　人氣をひや
ゑちなう　別納なる建なる所也　牝寝殿（スレンテンニ）
夕なりしひもとく　夕良の扇（ヨキ）は縁まてかくのあとく乾（カホ）
をもわらせすとなり
なれひのつや　夕乾（ユフカホ）わしし時の事成ゑしむあての
方の時乃とそいかくとなる
ひかりありとの方　たゝれ時にてしかくともゑる
るなりしとおほめれて苔（コタヘ）ゑとを時の空目より只
今をたくひなしと也　唾（ツ）を委
今よくみて方の光はさりゝるとよ光り
清文せを　夕乾（ユフカホ）を乾（ウラミ）ふなり
あ海乃子　たゝ波乃よする法に世紙清くをあ下れ
子なまはやをもちゝめを　いやしきといはんためや
あひこれゝを　あまへゝるむなり

我ゆゑ　女乃御まれ子といふ事付てまゐの男の人数なり
ねぎ名のり給ひぬもことりまと也　あさ乃のるを不
但虫れ我ゆゑと言をとらうなのめ世をそ恨みし
うあんの　右をの　惟光（コレミツ）のたまのつまたるとおもはんこ
と紙なる事
ゆつりきこえて　惟光の掴りきんをむひろく申給事
なるよと思也　さきありぬへき　其子細可給あまたる
こそ　源如ひれなし先きとむしより反悔（コウクワイ）なる事し
あやしれしら　夕乃心不熟（フリヨ）に思ひのきぬ所へ。とる事
名称なく成ふる　自他（シタ）悪（シヽ）給ふ名称なくとけ給ふと也
夕ハまさむ庭を作給ひと恨給へ事
内にいりふ　大裏（タイリ）也
六条わたる事　源れおりひ出し給たよりに霊（リヤウ）来まり
御まりむふりき　六むとけぬに夕と持ひくらへ給ふ也
ことなる事なれ　夕を三位のみなり
時めのし　をてあそふと云心可成　春めく冬先く心同
山ひこ　山表　あまひこ　木玉なとのおと也　打倦てよ
まらんあふ山ひこれあらへぬ山をあらしとそおりふ
心おそ　病者をみるそ死起（シヽサウ）なり
うへまらそ　殿上したる童（ワラハ）也
人をれ連
御口　蔵人（ゾウラウト）にこれ披官（ヒクハン）也　今乃世に奏首（クハンシユ）なとの祥賀ふ

そ是を召具をしまゐ院にてハ我若所といへり
兵具たいを　地下りこの番衣　暴厳を世さまれ也
火あやうしと　雑何火行トヨム　史記
内をおほし　火裏を也
かたいめん　家一刻に内竪時乃扎を養得ら乃すこいめ
むあるを　かたいめんとそ召褐をいふ設上に沿とのぬ
せる得ら乃たりひろ召をとまれて召案心也　此次に
滝口のとのゐ中しと云も召褐と同滝口女人あり何を
家の刻の事なれをいこくも又ぬにようまとり事也
女ぬそさかりし　うれまく勤を世さまれなり
当れそろしう　を氣也

れまへりこそ　右をのまなまを夕と云る也
当とし連
なけし　しきゐのるなり
所りしこうひて　礼義を時によらぬと也
むりし　掴袴　寛平　法皇与京極御息所同車波河道院御
拝之時蠱心霊御息所へ　ことをかをり法皇わの后下
として何う天子に物をかをと物定あるしをなり
後漢蔵令加持穣せあるとと云こ　多略之　河にまを
きけとし　ことびそ子ぴ事て
当をひ掴うく　魂魄魂ハ天人の形魄ハ如鬼神　魄ハ屍
を守也　魂ハ肉をなる　魂去を掴をそろしきとなり

南殿のをの乃　世継云　此段　貞信ひ
いつれの時とそれ程を得らせ宣旨まで拝の座りしれ
けしますに南殿乃うしろをとゝ張らせ給ふ御劍の石
付をとらへるをあらくり給へも毛あなりの乳刀のこ
とくや鬼とおかして勅定取てもりまなに拘そゆるさ
せそあしのまなんとて太刀をぬき給へもうしとり
乃角に海かりきるとそ大鏡にあり　河皆略之書
夜の事　右近をいさめ給ふ也
むくくしさ　蠢　いふ事を見むあり　春乃むしのむ
くめくむくろなり
きしきある鳥のうち拝　清原ほ安家もぬむるゆゑ
うちひゝる声なるべし
説文云　倉父母不孝鳥也云々　白氏文集　函電持
梟鳴松捷枝狐藏蘭華叢
まなくきさぬべし　右を拝　兆可死しそやもめなり
く海く　屏風のかくれるを
あしをとひしく
延長八年清涼殿　霹靂之後貞宗清師候清涼殿之時安
大人足著芒邪神所為也云々
ありのけこめぬ　好文仁まで一所にぬぬ也　李尹王記
風乃上りあるのけこめぬ蛍の身を行来をしらせ
成ぬへらなり

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

かくの　四圍　のこめこるむる所をしひろけぬ所也
もいて死ゝ　右をの御ゐる事
うもむしろ　ゑま人をかへうつを時　延(ムシロ)不曇(ツヽ)ぬり　河委(ニシ)
さゝやの　ちいはまむなり
くゝ事　袴(ハカヽ)なとのくゝ事なるへし
我も　源は余(イノチ)いかゝとる事
ふもうふ　大貳のめれとの下人　執死(トシシ)たゝるを見出はて
善まそをきし　我源はにきあしめし　付たるとなり
神事　のんまさとよめり
夕八月十六日　逝死(セイシ)　九月を秋月まで一日より御神事
あり　廿ケ日　穢(エ)りふれ　御ふ家　内叶(カナウ)ましき也

太神宮へ　な幣(ホウヘイ)あり
むしい　世礼也
いのなるいきふれ　かくは番事ふ　ひ此へ御ふとる事
むまつゆき　夕を以乃おりひ人なり
たいくし気　速うし成るとも　退宮(タイノ)を思ひり
蔵人の弁　以牙(ソシトシト)　頭へをおもてむきる事
日番
ゑりくと　夕餘(コヌ)をのん　昌あまきこれのなり
けさを告うし　右近の事也　世間のうき度毎に勇を
なけを涼(キ)告うあさく成るめ
あしらんをき　源へは意をえんとて中数を気さると也

されへきにこそ　定りるとなり
うらひとる　世達（エンリヨ）惠ゆへるを
かことのこれまをや　いとうらふなしたる事を
世上乃人志らんとなり
少ねの令姆　帷光（コレミツ）の弟（ヲトヲト）也
かくまれ人れ　甚（レ）ふかし浴也　定家以前　霜枯乃草
此戸さしのちひしさも震ふかるまひ乃山里　心同
ちらにことなく　可然せよと花柳也
六百番ふ　俊成判（ハン）詞に上品此所をことなくと云ふ
ことくしくすへ気なりもあらすすそ狂やしらを
結抄にむつかし　此はみまを無（ヘツギ）の儀也
鳥へ野へ入るなあり　此なるを其
女ひとを　右を也
とのうたりそ　外（ホカサマ）様なり
拝さくぬ　万歳多坂抄云ク
喪家（サウケ）佛事ノ次第葬送（サウソウ）以前無（天）云会伝
清名乃うたり　十七夜おまはりや
大とこ　大徳　清師名也　出家をかめくいへり
いひけぞのれ　夕を行としたれそと人なりいひけれり
遠ん事めいまくとなり
別といふ掛　杜子美詩作　死別已吞声（ニラム）生の恋（ニツクく）悲ふ
かくいふ　源の清男也

まの紀の　河原院まく源のをきせはいらせられるを
夕めしてある御道中におほしめし出ス也
御くしのほとく　滂河使我をりおれ　川せく宮なり
大しくハ焼ツミとそかゝを河を云り　焼度ゝ崩クツル　御城ち
をしられるを　玄米城ルとと云寺号也
かくおれ道のをまて　放埒　着　鳥ノハフルウ
立て行ゆく志を志らせかくのこそ乃をまて海とふ
へらなる　古今　祧背ハイカイ　無風
身を持つむをふもをふらさし御料ゆへいのくる御
としおくく
まのをりくし　帷光むりら御袴ヤしくると思へ里

御よりらぬむまてとなり
海ことに外　源外御ひて起御をさおなり
志ほう　御法　ををうとよ給り
御乃字へてをみしをとよむ
ゆくいと　服衣ツヤ也　ふくりやしくる義を不用主のなり
きるなり　意ツネの事なる也
年此のこ　夕ま右近離ハナレてるを
をうひ　夕に源ををくまゐりしとなり
いふのひ　夕ハとりもの也あれを也
海乃足　志けきるりを如ト雨脚ノアシ袴ハ　俗ツク　まり
ひとりり　御物ワツラヒも　ありらひもるを

内乃法とのゐ所　桐壺（キリツボ）也
あらぬ世ゝ　蘇生（ソセイ）のあらゝろ給へし
九月　なかぼ天とよ給り
あまのこ　は院まくりひしをも出さくや
いけのほと　みしり天なふせなまを茶（ナノリ）の程もなりゐ
しとなり
御名かくしを　源乃ゆりく法名をかくし給ひしをうち
ことに夕れなりめし法るといへりなをさりまれなり
めをな御名をかくしや　なりしそ法くるゐ
人ゝゆるされぬ　左右大臣殿なとの源をなり
なかくれまし天　けさ乃程えるまとあるしけ　給なり

目く　地蔵并　因縁経　十輪経ホりあり
ミつから　夕れ思ひしをうしろくゝ給へいかくとや
おやさち　かゝ云ぶをり三位中ゐ夕の丈三位昇（セウシン）年不
識して文つの色なかやもなりひ給しとなり
こうれ秋法　あらしけそふの時乃事也
次と夕契（チギリ）三年二年めふ出ふつゝ出来給四年めよ
源ゝしあひ給ふ又年めよ西出へくるゝ給へ里
まてとあるを　まりてとよむ
すこ目ひ給ひて　経絶ぬ今ハのきりと山里ふ勇をかく
すへき者りとめてん
ふるゝ　山里のかゝや　とても　むをのむなり

きこゆ　是にて先玉鬘（クマカツラ）の事をはかりなる

あるし院　鶴頭（イヌドクビ）経原（ミヤウハイ）院也　種々税を定　河原院に一日

御座あるまゝ鶴可鳴（ナク）夜乃ことゝ心なし故に来六ケ敷也

なく殿にけり　右近は夕の乳母（メノト）の子なる

いとしたゝ　思ふとていやしも人にあらはしたるのなら

ひてうそねを言しよ

もうなひこうこう　源御詞

こつうう　源乃わのすくよのなるぬ心なりひにやらむ

となる

かそこゝ座りうのに　陽體（ハテイカウ）剛（キヤウ）強（ヤウ）自在（ヤウ）院（ヤウ）栗（ハ）呪（シユウ）従陽婦（フ）人（ハ）ゑ

三従（サウ）之礼無自専（ニシヤウハニスル）之儀　又行大義第二第七

相はくことをさすのはしてなり

あさむのまぬへ天の　可然也

あの御りこ乃　右近心中なる

みし人の方　煙のたくを雲となれを也　夕貞（ユフカ）を思ひ

出給ふに宅のうちくもりたれましさなとしふへし呼

むつのしきかにて主心を捐遠（サウイ）　法なむ作きし気とを

称名院殿にもむつましきとも仕拝こうなり　能雪

御目筆なをまいむ作りし気ゑとを定可依（ヨル）時也

みこのし　又条にて支給ひしも

八月九月正（ニ）長東千参万拝を山（ヤ）時　白民文集

うしと　宅心中なり

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

詞りきこのひ給人里　双地なり也し
見まれを　句
かしとまく　あく乃きたりる里
引のめりす事　引のとられて折りひ給し心又むきお
折くとや　事又このむむ出来ようとよめり
折とけて　折を思ひのあん人を無子細思へしとなり
こゝろを通　あ里ひ下ま又もなれ名ハたちぬ也し人を
くりうぬ世ふしきまへを
この人乃四十九日　なく方ぬりとよむ
十月四大日法　なく七日ゝ　お尊しし
法花を　かけとられまくハよ給ひ

ゆうづく　女房祐ふもものゝきぬを布施ゝ　社用なり
そんぢうそう後　文章博士　大江宰相也
重明親王家室教恵氏四十九日願文　後江相公朝綱書之
史文粹　生者必滅釈尊来免梅檀之煙　樂室長恵天人
釈尊又養之日　此釈文之詞也　梅又と拝尉と云り
なくくそ事　来せ拝令を求心なり
これ程まてそ　四十九日まてそ中ゝまあり　ぬへし今
日の絶音り生所定らんとなり
示ことに　のこされてそ也る里
右近ハ　三人の中に所服也　服此字いのこゝろ別人
る後へし　生て可勘なり

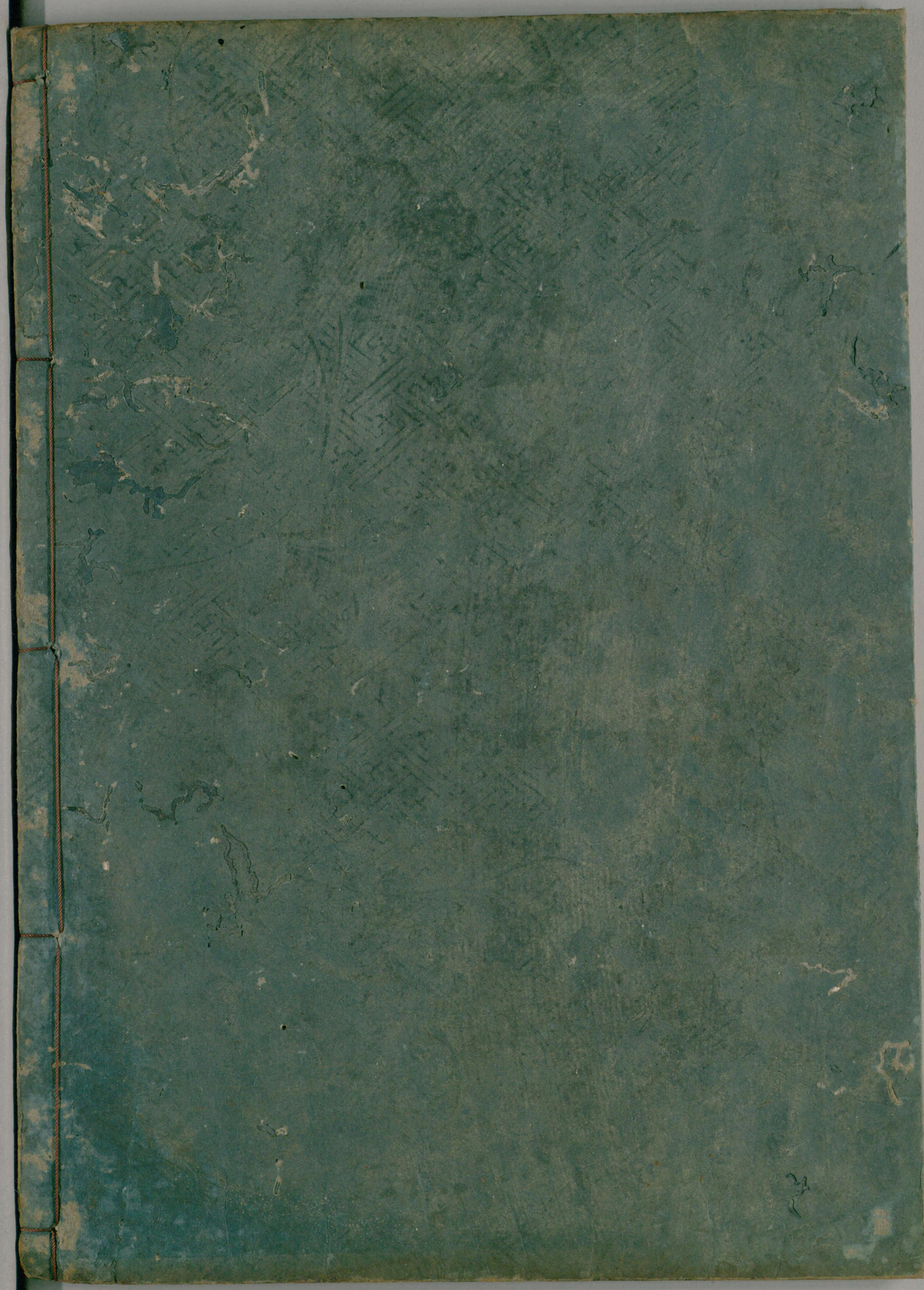
西乃京を　思ひつゝのめれとなる也し
値りん掬乃　河原院りあ御霊の源氏まんをそれく夕
を見しと思ひ也
くしき　とことなる所をさく故也
何ふ事を　あふと云あらゆなり
逢はての事　あふ海ての殺見とてとうとく見けめなこと
こゝろうふりくけるとなり
うるさけれを　双也
世をのを主事　十月一日に[illegible]あり一年に二度あり
こうちぎをり見し給ふ成みてなり
[illegible]　何も

見ひしも事　見ひしを夕　きふのを[illegible]也　秋乃事ハ
主冬をれ世ぬけあること余情ぬりし事を此儀留と也
[illegible]しあり給人と　或筆ゐを
ゑゑくしき事
悪事書ハいかゝまてもらをそ又渉門法子とてかめ
ゆゑりもうしてを世曲あ御なとにとのりひさり事
[illegible]つをさり所をかれとも他事め書を書の世ゑを
法子とてみん人もかゝるなりすみてあ海ゐまりかめ
ゑるとあまをぬけ也なり

857
118

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用